2012・2013年度教研テーマ
共に生き共に歩もう
―新しい連帯をめざして―

キリスト教学校教育 12

http://www.k-doumei.or.jp/　E-mail info@k-doumei.or.jp

キリスト教学校教育同盟
〒169－8509 東京都新宿区西早稲田2－3－18－72
電　話　03（3203）0361
ＦＡＸ　03（3203）0362
理事長　佐藤東洋士
編集人　坂田　雅雄
頒価200円（加盟法人の購読料は会費に含まれています）
（毎月1回15日発行）

キリスト教学校の使命

西原廉太

「キリスト教学校教育」とは何であるのか。わたしたちキリスト教学校につらなる者たちは皆、この問いを前に日々苦闘している。

娘が、6年間お世話になった、あるキリスト教学校を卒業した時のことだ。娘のクラスには、車いすで通学していたM君がいた。彼は、娘とは吹奏楽部の仲間でもあり、吹奏楽部のマーチングなども車いすでしっかり参加し、沖縄の修学旅行も満喫した。そんなM君は、高2の秋に、新たに白血病に冒されてしまった。それ以来、M君は放射線治療などのため、学校に来ることができなくなってしまった。

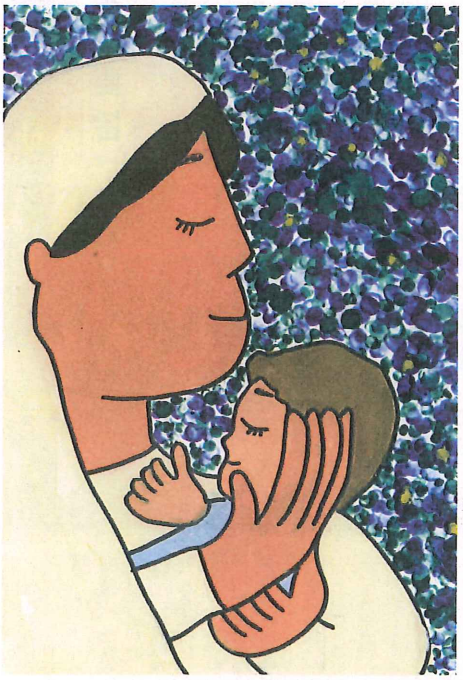
そして卒業式の日。クラスや吹奏楽部の仲間も、M君と一緒の卒業式を望んでいたが、体育館で彼の姿を見ることはできなかった。ところが卒業式が終わった直後、娘の教室に、同級生や吹奏楽部の仲間たちが急遽集められた。そこにはストレッチャーの上に乗ったM君が、ご両親、お姉さんと一緒にいた。校長先生や他の先生たちも集まって、「M君のための卒業式」が行われたのだ。そこにいた、同級生たちも、先生たちも、お父さん、お母さんも皆、号泣した。

M君は、それから4ヶ月経った7月に、天に召された。翌年、わたしの一番下の息子が、姉と同じ中学に入学した。息子がもらってきた、ある先生の自己紹介には、こんなことが書かれていた。「昨年の高校卒業式、特に3Bの教室での一人の生徒のための卒業式は、一生忘れられない思い出であり、教員になって本当に良かったと思っています」。この学校が、「一人の生徒のために」という願いで満たされた学び舎であることに、感動を覚えた。

「キリスト教学校の使命」とは、実はそれほど難しいことではない。ただ、一人ひとりの生徒や学生に、「あなたの存在こそが大切である」ことが伝えられれば良いのだろう。そして、「あなたの存在が大切にされているように、あなたもあなたの隣人を大切にしなさい」という福音が伝えられれば、きっと十分なのだ。主は、わたしたち一人ひとりをかけがえのない子どものように、抱きしめてくださる。その時に、わたしが、主にとってかけがえのない存在であることを体で知る。命がけでわたしたちを抱きしめて離さない神の愛を知り、そして隣人を命がけで愛することを知ることができる。

このことを、子どもたちに伝えたい。あなたは、無条件に愛されているのだということを。そしてあなたも行って同じように、隣人を無条件に愛さなければならないのだということを。

〈立教学院副院長、同盟常任理事〉



「母に抱かれし幼子」　西南学院小学校2年　長谷川　琴

第54回 学校代表者協議会
東京キリスト教学園で開催

第54回学校代表者協議会が11月10日(土)午前10時30分から学校法人東京キリスト教学園（東京基督教大学＝千葉県印西市）で開催され、59法人から101人が参加した。会場は昼食を除きすべて東京基督教大学チャペルで行われた。磯貝暁成教育同盟事務局主事の進行で、午前中は廣瀬薫氏（東京キリスト教学園理事長）による開会礼拝（司会＝東京基督教大学教授、神学研究科委員長・山口陽一氏、佐藤東洋士教育同盟理事長（桜美林学園理事長）および廣瀬薫氏の挨拶の後、今回は講演は行わずに「キリスト教学校教育同盟のミッション（使命）―学校運営の困難さに応えて―」と題して発題が行われた。まず、佐藤東洋士氏が主題説明を行い、その後、倉沢正則氏（東京基督教大学学長）、堀岡啓信氏（北陸学院中学校・高等学校校長）、森孝一氏（神戸女学院理事長・院長、教育同盟常任理事）（発言順）がそれぞれ発題した。

食堂での昼食・懇親の後、東京基督教大学留学生によるプレゼンテーションがチャペルで行われ、バンブーダンスの披露等一同大いに感銘を受けた。

午後は発題を受けて全体討議が水口洋教育同盟理事（玉川聖学院中等部・高等部部長）の司会のもとに行われ、発題者による補足のコメントが述べられた後、会場から質疑応答や意見交換が活発に行われた。

その後公文宏教育同盟常任理事（女子学院理事長）が、維持財団の一般財団法人への移行ならびに教育同盟との関係について説明し、森島牧人教育同盟常任理事（関東学院学院長）による閉会祈祷をもって協議会を終了した。

これからの教育同盟のあり方を共に模索するうえで有意義かつ充実したプログラムであった。

なお、今回は本協議会の一環として、前日の11月9日（金）午後6時30分から青山学院大学総研ビル第19会議室において研修事業再編に関する懇談会が開催され、58名が参加した。

懇談会の報告、10日の開会礼拝説教要旨・発題要旨・レポートは1月号に掲載します。

常任理事会・評議員会・理事会開催される

教育同盟および維持財団常任理事会、維持財団評議員会、同盟および財団理事会が、11月9日（金）に青山学院大学総研ビル第18会議室で開催され、維持財団の一般財団法人への移行と研修事業再編の件を中心に協議された。具体的な方向性が確認された。

開会礼拝

加盟校動静

大阪キリスト教学院
9月30日付けで津村春英氏が大阪キリスト教短期大学学長を退任、後任に10月1日付けで池田美芽氏が就任。

北星学園
酒井玲子氏が10月17日付けで理事長に就任（学園長兼任）。

静岡英和女学院
創立125周年を迎え、11月26日（月）9時45分から記念式典が静岡英和女学院中学校・高等学校礼拝堂で執り行われた。

（訂正）11月号2面大学部会研究集会レポートの記事中、小見のぞみ氏の所属は「聖和短期大学」でした。お詫びして訂正します。

〈山梨英和中学校・高等学校聖書科教諭〉

聖書のことば

宍戸尚子（ししど ひさこ）

「人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」
（サムエル記上16章7節）

ベツレヘム、それは救い主イエス様がお生まれになった特別な場所です。イエス様誕生から千年前、その同じベツレヘムにサムエルがやって来ました。エッサイという人の息子の中に新しく王になる人がいる。この神様の言葉に従ってエッサイの家を訪れます。息子たちが一人ずつサムエルの前に連れてこられました。まず長男のエリアブです。体格の良い堂々とした青年です。「決まった。この青年だ。落ち着いている王にぴったりだ！」

ところが神様は、私は私自身の「心によって見る」とおっしゃいます。7人の息子と次々に会いましたが、その誰についても神様はよしとなさいません。途方に暮れて父親のエッサイに聞きます。「あなたの息子たちは皆ここにいますか？」「実はもう一人末の子がいますがまだ子どもで、今、羊を飼っています。」「選ばれる可能性がないと思ってもその子をここへ。」

こうして羊飼いの少年ダビデが連れてこられます。まだ小さい人です。けれどもこの人が神様に選ばれた人でした。そこにいた誰もが、ダビデ本人さえも驚いたことでしょう。でも神様のお心はダビデにあったのです。

ダビデが立派な心の持ち主であったからではありません。美しい少年だったからでもありません。ただ神様のお心がダビデの上にあったからです。神様がそのお心のままにご覧になり、まだ小さく弱く人の目から見て欠けのあるダビデを選ばれたのでした。

同じベツレヘムに救い主イエス様がお生まれになったとき、その方は小さな生まれたばかりの赤ちゃんでした。けれどもこのお方を通して神様は御国を建設なさいます。

私たちも神様の計り知れないご計画によってキリスト教学校で働き、学ぶことをゆるされています。特別な力があるというわけではなく、つまずきやすく弱りやすい私たちを選んで、神様がご用に招いてくださっています。弱く小さいところに働いてくださる神様のお力を皆で共に信じ、招きに応えて歩みたいと思います。

〈山梨英和中学校・高等学校聖書科教諭〉

＜12月号目次＞
▶第54回中高研究集会　〈2～3面〉
▶公募　〈2面〉
▶東北・北海道地区教研集会中高部会　〈3面〉
▶関西地区新人教師研修会　〈〃〉
▶わが校のワンポイントアピール　〈4面〉
▶教育懇談会公開講演会　〈〃〉
▶キリスト教Q＆A　〈〃〉

第54回中高研究集会

分科会発題要旨

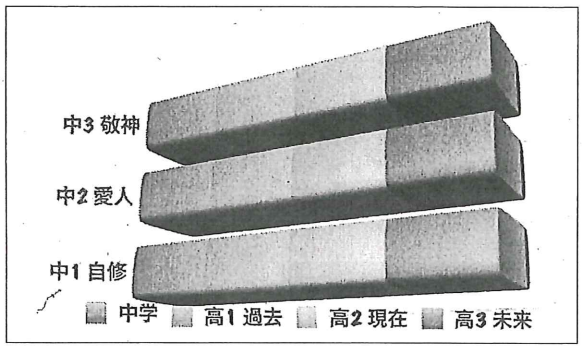
分科会1

キリスト教教育

山梨英和高等学校教頭　中安隆信

山梨英和学院は山梨県内唯一のキリスト教主義・女子校で、創立123周年を迎えた。校訓は「敬神・愛人・自修」である。この建学の精神を具体化するため、数年前から本校で実施している「キリスト教を中心に据えた6ヶ年の実践計画」を紹介する。中学では意識の発達段階（自分→他者→創造主）を考慮し、校訓の中心テーマを中1から順に　自修→愛人→敬神　に置き、さらに高校ではこれらを時間軸に拡張し、高1から順に過去→現在→未来　に置き、建学の精神の直線的な学びから、面的な広がりを図っている。（図参照）

具体的な実践例を学年別にいくつか紹介する。《中1自修》3月の「1日入学」で日課表「SEL F Development（自修）」を配り、入学前に各自の生活習慣（Sleep & Eat）、学習週間（Learn & Fun）の確立を図る。4月の一泊オリエンテーションでは本校の歴史、教育方針、礼拝について学ぶ。11月の一日修養会では「自分探しのワークショップ」を行う。《中2愛人》学年行事キャンプでは「友人との協力」を目標に、一日修養会では　ワークショップ「100人の村」を実施し、世界の隣人について知る。《中3敬神》修養会では「信仰に生きた人々に学ぶ」をテーマに浅川伯教・巧兄弟資料館、清里ボール・ラッシュ記念館（清泉寮）を訪問する。《高1過去》3月の修学旅行「沖縄・長崎」「韓国」を中心に、1年間の事前学習を通して過去の出来事を学び、校訓に照らして考える。修養会は車椅子の実習。《高2現在》今、国内外で起きている、ホームレス、失業、地震、児童労働、国際紛争、内戦等の諸問題に目を向け、「今私たちにできること」を考える。修養会は盲導犬と誘導実習。



《高3未来》4月のリトリートでは「与えられたタラントン、6年間の学びをどう生かすのか。」をテーマに将来の進路について考える。修養会では聖書・讃美歌カバーを作り、来年度の新入生にメッセージを添えて贈る。

その他、女性学、国際理解、平和学習も各学年に計画的に配置している。

山梨英和学院の今後の課題として、①生徒数の減少、②クリスチャン教師の減少、③聖書の授業の今後のあり方、④女子に特化した教育方法の開発、を提示した。これらの課題について参加者と共議し、有意義な分科会となったことに感謝します。

分科会2

生活指導

盛岡大学附属高等学校教諭　澤田真一

ア　いじめのない学校生活めざして

1　学校生活アンケート

年2回（5月と10月）アンケートを実施した。内容について、各担任が個別面談でさらに聞き取り、必要な指導を担任、学年団で行っている。

2　平成21年度に起きたいじめとその指導の取り組みについて

①いじめの概要

1年女子生徒5名が同じクラスの女子1名に対し、いじめ行為を行っていた。

②いじめの発覚

母親から担任への電話で発覚した。その後、学年・生徒指導課で聞き取りを行い、いじめの事実を確認した。

③指導の概要

○加害生徒5人を無期の自宅謹慎とし、対策委員会をつくり、加害・被害生徒一人一人の担当教員を決め、情報交換を密に行い、統一した指導を行った。

○クラスに対しては、副校長が朝のHRに入り、いじめは絶対許されないこと、見ないふりをしない（行動しない良心は悪の味方になる）ことなどを訴えた。

全校に対しては、いじめアンケートを行い、その調査に基づいた指導を行った。

○謹慎の解除

被害生徒への謝罪の場を設定し、謹慎解除を行った。

○謹慎解除後の指導

謹慎解除後も、毎週1回担当者との面談を、3月まで続けた。

○生徒のその後

加害、被害生徒も卒業した。（加害生徒1人は、進級できずに退学）

④加害・被害生徒の保護者との対応について

どちらも、しっかりした大人になれるよう指導したいこと、いじめに対する学校の取り組みなどを説明し、理解してもらった。

⑤教訓と課題

○いじめを起こさないよう指導を強めることが一番大事である。早めに指導することが必要である。

イ　頭髪服装マナーアップ運動について

1　目的

本校では服装マナーアップ運動を行って、通年で指導している。

2　指導項目

生徒の状況に応じて月ごとに項目を見直す。当面は以下の項目とする。

①化粧

②ネクタイ、ボタン、シャツ出し

③スカートの丈→膝頭の真ん中とする。（目視）

④男子の腰パン→腰骨の上にベルトがあること。ホックをはずさない。

⑤スリッパ履き

3　指導

上記項目に一つでも違反した生徒については、その日の放課後に残り、800字程度の反省文を書く。

4　昨年度結果

繰り返し指導を受けるは生徒もいたが、10回以上はなかった。

5　成果と課題

生徒の服装は格段に良くなった。しかし、校外では服装マナーは守られない傾向にある。スカート丈の指導が特に甘くなりがちで、指導方法の見直しを図り、さらに服装マナーを向上させたい。

分科会3

発達障害とカウンセリング

清教学園中高、大阪女学院中高スクールカウンセラー　木下忠恭

近年、発達障害を抱える生徒への対応（支援）が注目され、様々な取り組みが行われている。その一つが従来より定着しているカウンセリングである。しかし、発達障害の支援に、カウンセリングだけでは十分とは言えないと言われている。この分科会は、発達障害を抱える生徒やその家族への支援をより効果的なものにするための組織、システム、指導支援方法等について考える機会とした。また、キリスト教学校としての支援はどうあるべきかについても検討がなされた。

まず、「発達障害を抱える中高生徒の特徴」「校内カウンセリングの効果」「効果的な支援のための校内体制」「ソーシャルワーク的視点の導入」等について、発題者のこれまでの実践を基にその考えを示した。

その後、大阪女学院中学校・高等学校の平岡茜氏より、実際行った指導支援の事例を提示していただき、校内支援体制、組織、システムがどのように機能したのか、その課題や支援のポイント等を検討した。

その後、それまでの発題を踏まえて、参加校での取組や課題等の実情について、忌憚のない意見交換を行った。それぞれの学校では、様々な取組が成されており、その取組の数だけ課題もあるようで、各学校の理念や環境、状況等が異なり、その課題も異なるが、共通する部分もあるので、今後は今以上に支援や取組についての情報交換が重要になる等の意見が出された。

また、キリスト教学校では従前より支援が必要な生徒や関係者への指導・支援が充実しており、キリスト教学校としての支援については、キリスト教学校主義を推し進めることを基本として、各学校の状況に応じた体制やシステムをどのように構築するかについて、活発な意見交換が行われた。全国各地の学校から様々な声が出され、大変有意義な時間であった。

分科会4

生徒募集問題

鎮西学院高等学校教頭　川﨑　健

長崎県でも少子化が確実に進行し各私立高校が軒並み定員減を行う中で、本校は20年以上にわたって一学年300名の定員を維持し、現在も計916名の生徒が在籍している。

定期訪問やマスメディアによる通常の広報活動の他に、特に力を入れてきた取組としては、①女子生徒増、②寮生増、③保護者の声に耳を傾ける、といったことがあげられる。

①女子生徒増―2005年女子生徒減、男女比が非常にいびつに。そこで女子生徒を増やす方策の一つとしてかねてから不評であった制服を変更。生徒たちに聞き込み、業者によるプレゼン、提出された制服を在校生に着せての人気投票、文化祭で展示しての人気投票などを行い、業者を決定。その本社でまる2日間缶詰の状態で選定。第3回のオープンキャンパスで在校生に着せて中学生にお披露目。反響大きく、今現在2年連続で女子生徒100％の満足度。近隣の中学生・高校生・保護者からも好評。

「生徒たちが着たいと思える制服を作りたい」という出発点がよかった。

②寮生増―10年前2年連続で102名定員の寮が56名と約半分ぐらいの数になり赤字経営化。そこで、高校での離島率の高い離島の生徒をターゲットに。まず、信頼関係の構築のために年4～6回中学校を訪問。2004年に県内の私学としては初めて対馬での現地試験を実施。現在は対馬からの寮生28名、寮生も92名まで増加。今は定期訪問の際に必ず地区の保護者会を実施、そこで生徒たち一人一人のビデオレターを流している。非常に好評で、今年も28名の寮生の内25名の家族40名が参加。

③保護者の声に耳を傾ける―真に生徒を理解し、よりよい教育を行うためには、保護者の理解と協力が不可欠。その生の声をきくべく、学校側から各地区に出向いての地区保護者会を5年前からスタート。19時開始最初の30分が学校からの説明、残りの1時間が学年ごとに分かれての座談会。学校への要望や質問

（3面に続く）

公募

※採用予定日は特記以外13年4月1日です。

▽福岡女学院大学

▼国際キャリア学部国際キャリア学科（14年4月開設予定）

職種＝国際ビジネス関係、企業他　教授又は准教授各1名、中国語、日本語　教授又は准教授（契約教員）各1名

採用＝14年4月1日

応募締切＝12月28日

▼人文学部現代文化学科

職種＝国語教育・日本文学（近現代）教授、准教授又は講師1名

応募締切＝1月18日

▼人文学部英語学科

職種＝国際交流分野　教授又は准教授1名

採用＝13年10月1日

応募締切＝1月18日

問合せ＝☎092-575-2971

▽自由学園高等科（女子部）

職種＝英語科専任講師又は非常勤講師1名

応募締切＝12月22日

問合せ＝☎042-423-3359

▽女子学院中学校・高等学校

職種＝英語科講師若干名

応募締切＝12月14日

問合せ＝☎03-3263-1711

▽立教新座中学校・高等学校

職種＝理科（物理）非常勤講師1名

応募締切＝1月7日

問合せ＝☎048-471-2323

▽関西学院高等部

職種＝英語科英語契約教員（ATE）若干名

応募締切＝12月21日

問合せ＝☎0798-51-0975

▽清和女子中学校・高等学校

職種＝理科、体育科専任教諭各1名

応募締切＝12月20日

問合せ＝☎088-863-1200

（2面より続く）

などを述べてもらい、出てきた質問や要望には私が全て回答し、それを文書にして12月の成績通知票に同封して全保護者に渡している。中には本当に耳の痛い話もあるが、とにかくできる・できない、できないことには必ず理由をつけて通知。非常に大変な作業ではあるが、保護者からの信頼を得て、非常に評価されている。実際に出された要望で、階段の手すり、暗い場所の外灯、熱中症対策の製氷機、パンの自動販売機などを設置した。素早い対応に感心されることも多い。

以上が本校の力を入れてきた取組であるが、生徒・保護者の口コミに勝るものはないので、広報の原点は在校生・保護者。そしてその対応の基本は「誠実さ」と「細やかさ」。この部分はキリスト教学校が最も得意とする分野。だから、本校の「現場と地域に根差した広報活動」はこのキリスト教本来の精神にのっとった広報活動であると言えると思う。

レポート

時期・内容を見直して

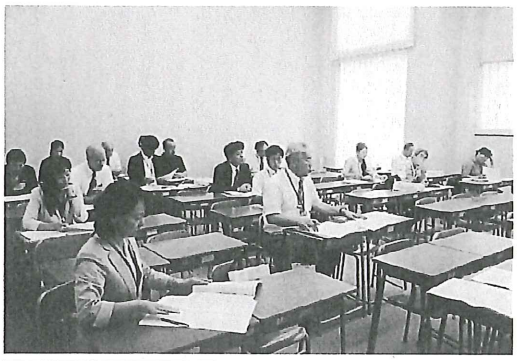
玉川聖学院中高部長　水口　洋

教研中高部会では、かねてから3月末に行われていた中高研究集会について見直しが続けられていた。開催時期が現場の教師たちにとって、忙しく参加しにくい年度末であることもあり、どうしても参加者に偏りがあることが課題の中心であった。中高の現場教師にとって意味のある実質的な研修会の開催を願い、今回から時期を変え、内容も変更して、2日間の開催日程で、10月1～2日に、東京の玉川聖学院を会場として開催された。

前日に日本列島を駆け抜けた台風17号の影響が心配されたが、北海道から九州まで各地から無事に参集した56名と開催校の十数名を合わせて始まった研究集会は、安達英行委員長（清教学園学園長）の挨拶、北垣俊一氏（山形学院理事長・高等学校校長）の開会礼拝奨励の後、平塚敬一氏（前教研担当理事・前立教女学院理事長）の示唆に富んだ主題講演をもって開始された（内容は本紙11月号に掲載）。

午後には、①キリスト教教育、②生活指導、③発達障害とカウンセリング、④生徒募集問題、の4つの分科会に分かれて、それぞれの発題を受け、全国の先生方で議論が展開された。今回の研修会では、この分科会があったことで、様々な立場の先生方が集まりやすかったように思われる。養護教諭や各校の募集担当の教師の参加が見られた。どの分科会も有意義で活発な議論が展開された。その後、各地区の活動や現状の報告を聞きあい、その後、懇親会となった。その席では東北で被災された学校からの報告があり、共に連帯をしていく事の意味を再確認させられた。

二日目の午前中には、今回の研修の新しい試みとして実施された授業見学の時間をもった。朝の生徒礼拝から始まり、中1から高3までのすべての授業が公開され、各自の興味関心に従って熱心に3時間の授業見学が実施された。お互いに授業を見合うことで学べることは沢山ある。キリスト教学校が真の共同体となるためには、切磋琢磨を繰り返して、より良い教育内容に高めていく努力を共にしていくことが肝要であり、そのための学びの機会として研修が設定されることがふさわしいとの教研中高部会の判断が、このような形で実現できたことは画期的なことであったと思われる。



午後には前日の分科会の報告と全体討議が行われた。そして最後に川俣茂氏（清教学園中学校宗教主事）の閉会礼拝をもって、研究集会は締めくくられた。新しい形に変更してからの最初の研究集会であったので改良の余地はまだあると思うが、全体として有意義な研修を実施することが出来たのではないかと思われる。今後、全国の中高の教員にとってさらに有益で実質的な学びの時となることが出来るよう、今回の体験を生かしてさらなる研究集会を展開していきたいと思わされた。

東北・北海道地区

キリスト教教育の本質と課題(18)

地区教育研究集会中高部会

2012年度東北・北海道地区教育研究集会中高部会は、10月18日～20日、12法人・全15校より40名の参加を得（一部参加者含む）、遣愛女子中学校・高等学校とロワジールホテル函館を会場として行われました。

一日目は開会礼拝（東北学院榴ケ岡高等学校・西間木順氏担当）の後、酪農学園大学教授・高橋一先生より、『東日本大震災「後」を担う若い人たちに、キリスト教学校ができることは何か』という演題で主題講演がありました。先生は、大震災、原発事故の衝撃が、これからものごとを考える時の出発点にならざるを得ないことを認め、その衝撃の思想史的意味、信仰的課題を問いつつ、キリスト教教育の観点から、酪農学園大学の学生、教職員による震災支援ボランティア活動の意識、実践、可能性についてお話くださいました。最後に、ジョン・キーツの「世界の惨事をおのが惨事とし、そのために休み得ない者でなければ」という一文を取り上げ、その直接経験を持つことなくしては、《共感する知性》を持続的に堅持しようとする知的主体とその実践を導く倫理的・信仰的主体を確立することはできないのではないか、と語られました。夕刻より、聖書科部会と教育問題検討部会が持たれました。

高部会は、10月18日～20日、12法人・全15校より40名の参加を得（一部参加者含む）、遣愛女子中学校・高等学校とロワジールホテル函館を会場として行われました。

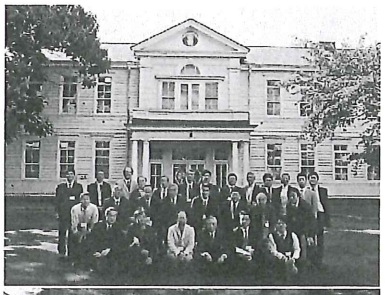
一日目は開会礼拝（東北学院榴ケ岡高等学校・西間木順氏担当）の後、酪農学園大学教授・高橋一先生より、『東日本大震災「後」を担う若い人たちに、キリスト教学校ができることは何か』という演題で主題講演がありました。先生は、大震災、原発事故の衝撃が、これからものごとを考える時の出発点にならざるを得ないことを認め、その衝撃の思想史的意味、信仰的課題を問いつつ、キリスト教教育の観点から、酪農学園大学の学生、教職員による震災支援ボランティア活動の意識、実践、可能性についてお話くださいました。最後に、ジョン・キーツの「世界の惨事をおのが惨事とし、そのために休み得ない者でなければ」という一文を取り上げ、その直接経験を持つことなくしては、《共感する知性》を持続的に堅持しようとする知的主体とその実践を導く倫理的・信仰的主体を確立することはできないのではないか、と語られました。夕刻より、聖書科部会と教育問題検討部会が持たれました。

三日目、朝の礼拝（山形学院高等学校・及川武氏担当）の後、残る2校の聖書の授業（聖書科部会（テーマ「今、光学院高等学校・佐々木栄悦氏が、内実的な授業への取り組みとして、思春期特有の悩みを念頭においた学びについて、また、原発事故による健康被害に脅かされる生徒達の偽らざる風景をお話くださいました。そして、福島に暮らす生徒達と共に汚染された空気の中にいることが、今、自分のなすべきこと、との思いを語っておられました。

二日目の朝、遣愛女子中高校の学校礼拝（北星学園大学附属高等学校・今城慰作氏担当）に出席。この日は、5校の「学校報告」のうち3校の報告がありました。遣愛女子中高校より「よりみち」について（井上記一氏）。宮城学院中学校・高等学校より「神を畏れ隣人を愛する　①3・11以降のこと　②教育の特色」について（酒井薫氏）。盛岡大学附属高校より「朝自習、学校自己評価等」について（関根伊作氏）。この日の昼は、当別にあるトラピスト修道院を訪れ、修道士の方々が守る「九時課」（祈り）に連なり、共に祈りを献げる時を得ました。その後、許された範囲で院内の見学をさせて頂き、静寂の中、「祈り、働け」というトラピスト修道院の心に触れるひとときとなりました。

三日目、朝の礼拝（山形学院高等学校・及川武氏担当）の後、残る2校の学校報告がありました。北星学園女子中学校・高等学校より「学校礼拝、校舎設備、言葉遣いの指導等」について（浅野純氏）、東北学院中学校・高校からは「被災した生徒達への奨学金、資金援助、学力向上への取り組み等」についての報告がありました（永井英司氏）。全体会議の後、閉会礼拝（北星学園余市高等学校・塩見耕一氏担当）をもって全日程を終えました。

〈遣愛女子中学校・高等学校聖書科教諭〉　鳴海とし子



東北・北海道地区教研集会中高部会

関西地区新人教師研修会

関西地区

真の「同盟」を築く

地区新人教師研修会

2012年度関西地区新人教師研修会が、京都の関西セミナーハウスにて開催された。10月27日から28日にかけ、同盟校19校から70名もの教職員が集った。研修では3回のグループワークを通じて、直面している問題・悩みを共有し、助言を頂いた。初めから終わりまで、礼拝と祈りによって神に守られた研修会であった。

様々な問題が共有された。私の印象に残ったものは、「キリスト教学校の企業化」である。教育の大衆化が達成されて以来、学校に経済原則が流入し始めた。大人数の生徒をいかにして最小限のエネルギーで効率的に教育することができるか、これが多くの学校の至上命題である。事実、研修会でもそのノウハウの情報交換に多くの時間が割かれた。しかし、一方で私たちはイエス・キリストをルーツとしている学校である。彼の生き方は見事なまでに非効率的であった。弟子達と共同生活を通し、一つ一つの真理を一人一人に人格を通してゆっくりと伝えた。それがイエス・キリストの教育であったのではないだろうか。今、キリスト教学校に勤める新人教師たちは、これら二つの原理の不和に悩まされ、混乱している。もしくは、諦めの色すら見え隠れしている。

生徒指導の問題、教科指導の問題、保護者との問題、部活指導の問題、多くの問題に教職員は時間も精神も圧殺されかけていることが報告された。特に生徒との関り方において、「生徒の心にどこまで関わるべきかわからない」と打ち明けられた悩みに私たちは多くのことを考えさられた。忙殺された教職員の心には生徒を迎えるだけの余裕がない。当たり障りの無い関係を求めようとする甘えが常にある。しかし、私達キリスト教学校は福音を伝えるべく建られた学校である。福音は人格を通して伝わっていく。深く関わらないのは確かにラクだが、そこに教育者としての真の喜びがあるのだろうか。「現実と「理想」、二人の主人が目の前を行き来する。「教師が理想を追い求めなくなったら終わりです」、向かってくる現実に絶望しそうになった時、大学の恩師の言葉が思い起こされる。私達が現実に負けていて、どうして生徒が理想を持つことができるのだろう。私達が世に服従していて、どうして生徒が世に勝つことに希望を見出せるのだろう。せめて学校だけは、生徒が夢や希望をおおいに語れる場でありたい。生徒が世のしがらみから解放され、神に近づける場でありたい。

様々な世の問題が私達の心の大部分を支配していることを、研修を通じて一同が認識した。皆がそれぞれ問題に直面し、日々戦っている。それらの日々の活動も神によって守られ、支えられていることを思う。神への感謝の気持ちを少しでも教育に向けることができたらと、私は強く反省する。一人では難しい。しかし、私はキリスト教教育を実行しようとする同志に出会えた。この研修会から真の「同盟」を築いて行きたいと切に願う。

〈キリスト教愛真高等学校教諭〉　新江（あらえ）　進

東日本大震災復興支援金

本紙3月号掲載以降に同盟事務局に送付いただいた学校・団体名を感謝をもって報告します。

同志社国際学院さぎな高等学校、近江兄弟社学園　事務職員夏期学校・夏期研究集会主日礼拝献金（以上4件、28万5370円）

わが校のワンポイントアピール

立教女学院の礼拝音楽

立教女学院は1877（明治10）年、米国聖公会から派遣された宣教師チャニング・ムーア・ウィリアムズにより創立されましたが、その使命は創立当初から変わりません。それはいつの時代でも時代を切り開く知的で創造的、かつ国際的な視野を持って神と人とに仕える女性の育成です。近年では平和教育も優先事項として実践されています。

そして、その教育を根本的に支えるのが日々の礼拝です。とりわけ伝統を生かした礼拝音楽は特筆すべきものであり、当然にして入学式、イースター礼拝、創立記念礼拝、クリスマス礼拝、卒業式等、すべての行事が聖公会の伝統的な礼拝形式を踏まえた礼拝音楽の中で行われます。

しかしここで言う「伝統」とは聖公会の神学的特徴に由来し、硬直した伝統主義ではありません。それはイエス・キリストの福音のいのちを継承する、時代に即した変革を無限に内包した信仰の有機的な形です。それゆえ故、本学院の礼拝音楽も、同様であり、変革と創造の脈絡の中で継承すべきものは継承しつつ、絶えず新しきものを追求していきます。

「高校クリスマス礼拝―ヘンデル〈メサイヤ〉（抜粋）による」はその象徴です。

前奏、聖歌、聖語、唱和、詩篇一九、Chorus―And the glory of the Lord―（全員合唱）、Air（Contralt and Chorus）―O thou that tellest good tidings・・・（聖歌隊）、第一日課、マリアの賛歌、第二日課、シメオンの頌、第三日課、Chorus―for unto us a child is born…（聖歌隊）、Recit.（sop.）―There were shepherds…（略）Air（Contralt and Soprano）―He shall feed His flock like a shepherd―Come unto Him all ye that labour、説教、使徒信教、主の祈り、特祷、聖歌、献金、Chorus―hallelujah（全員合唱）、祈祷、Chorus―Amen（聖歌隊）、退堂聖歌四五、ハンドベル演奏―Oh Holy Night A. Adam、後奏

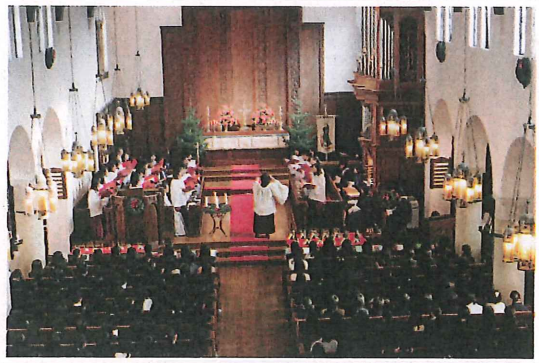
生徒たちの圧巻の合唱と演奏が聴く者に感銘を与えます。ここでは礼拝全体として変えてはならない様式が生かされています。

また高校卒業式ではまずアンセムとしてロッシーニの「信仰」（聖歌隊）、そして「希望」（在校生全員）、さらに「愛」（卒業生全員）の三部作合唱。まさに幼稚園から高校卒業にいたるこれまでの生徒たちの成長の証として主に捧げられる感謝の恵みです。

さて、この豊かな礼拝を支えてきたのが良質な音楽教育でした。音楽教育は創立時から米国聖公会から派遣された熟練したオルガニスト（例えば戦前の礼拝音楽指導者のミス・マレーなど）たちによってその基礎が築かれ、その伝統が今に継承されてきたのです。現在でも学院オルガニストの岩崎真実子氏（国際基督教大学オルガニスト、国際基督教大学宗教音楽研究所講師、聖グレゴリオの家宗教音楽研究所講師）から指導を受けた聖歌隊などが礼拝で奉仕しています。

また、2011年9月24日には「立教女学院聖マーガレット礼拝堂　文化財で聴くオルガンレクチャーコンサート『聲朗の世界』」をテーマに真言宗智山派の倉松隆観先生とその一門の僧侶の人々による聲明と岩崎真実子氏のオルガンとのコラボレーション」という感銘深い試みがありました。それはキリスト教と仏教との対話とも言える素晴らしき試みであり、それはおそらく、宗教、教派を越えてすべてのいのちをつなぐ試みでした。歴史的にローマ・カトリック教会とプロテスタント教会をつなぐブリッジチャーチとしての聖公会の立教女学院ならではの創造的チャレンジと言えるでしょう。

松本利勝
〈立教女学院高等学校教頭〉



高等学校クリスマス礼拝

キリスト教学校教育懇談会
第10回公開講演会を開催

日本カトリック学校連合会とキリスト教学校教育同盟が共同して組織し運営する、キリスト教学校教育懇談会主催の第10回公開講演会・シンポジウムが、10月27日（土）午後1時から4時30分まで、東京の聖心女子大学宮代ホールで開催され、約60人が参加した。

今回のテーマは昨年同様「キリスト教学校は東日本大震災をどう受け止めるか」で、キリスト教学校教職員の参加を対象とした。柴山惠子氏（コングレガシオン・ド・ノートルダム理事長）の総合司会のもと、最初に河合恒男氏（サレジオ学院理事長、日本カトリック学校連合会理事長）の挨拶ののち、前回に続き、高木慶子（よしこ）氏（上智大学特任教授、上智大学グリーフケア研究所所長、生と死を考える会全国協議会会長）が講師を務めた。

続いてパネルディスカッションに入り、西原廉太氏（立教学院副院長、同盟常任理事）の司会のもと、島名恭子（捜真学院中等部・高等学部教諭、伊藤悟（青山学院大学宗教部長）、土倉相（おさむ）（仙台白百合学園中学校・高等学校教頭）の各氏がパネリストを務め、東日本大震災被災地への各校の取り組みを紹介した。

最後に佐藤東洋士氏（桜美林学園理事長、キリスト教学校教育同盟理事長）が閉会の挨拶をもって本会を閉じた。

事務局だより

クリスマスソングが聞こえてくる。街を行き交う人々の気持ちも不思議に軽やかになっていく。

大騒ぎではない、静かなホワイトクリスマスが心の機敏に触れるのかもしれない。

深緑のモミの木に積もった雪が、時折ドサッと落ちてくる。

夕陽の輝きが、一面の白い世界を一瞬深紅に染める。

教育同盟が静かに変わりだしている。

11月10日、学校代表者協議会。

教育同盟は、「祈りに支えられた事業体」としてそれぞれの地で悪戦苦闘しながらも使命に燃える学校に、応えていくことを新たに表明した。

クリスマスに、新たな希望が生まれる。（主事）

<総会・研究集会等行事予定>　（2013年）

1／25、26	第55回小学校代表者研修会（福島県）
6／07、08	第101回総会（茨城キリスト教学園）
15	第58回小学校教職員協議会（東洋英和女学院）
7／27～29	第57回事務職員夏期学校（東山荘）
29～31	第83回夏期研究集会（東山荘）
8／28、29	第57回大学部会研究集会（仙台市）
29、30	第７回事務職員部会研修会 中堅事務職員研修会（３）（青山学院大学）
10／03、04	第８回事務職員部会研修会 キリスト教活動担当事務職員研修会（５）（恵泉女学園大学）

キリスト教Q&A

祝祷（しゅくとう）
―礼拝の最後の祈り なぜ手を上げるの？

酒井　薫
（宮城学院中学校・高等学校宗教主事）

Q　色々なお祈りの仕方があるようなのですが、どのような姿勢で祈ればよいのでしょうか？

A　礼拝のときに司会者が「お祈りの姿勢をとってください」っていう時がありますよね。初めての方は「お祈りの姿勢って？」と悩んでしまうかもしれません。ここでは、基本的な一般的な祈りの姿勢についてお答えいたしましょう。

①頭（こうべ）を垂れる。聖書の中には〝ぬかずく〟とか〝ひれ伏す〟とか、祈りの姿勢を示す言葉が出てきます。主なる神さまの前に立つときに大きな顔をして偉そうにふんぞり返って足を組んだりしてはいられませんから、頭を下げて祈りの姿勢をとる、ということになります。謙虚さを示す姿勢、と言い換えても良いのです。

②「手」はどうしますか？一言で手を合わせる、といっても指をどう組むのかとか、手のひらを真っ直ぐにとか、形は色々考えられます。基本的に指は組み合わせるように思われますが、手を合わせて心の集中を意識するのです。目を閉じれば、心も思いも一点に集中しやすくなることでしょう。

③お祈りをすると、眠たくなるという方が時々おられます。そんなときは「祈る人の言葉」を心の中で、反復すると集中力が高まります。是非、一度試してみてください。

④イエスさまはどんな姿勢で祈られたのかが聖書の中に描かれています。ゲツセマネの祈りの場面として有名な場面ですが、三つの福音書それぞれの姿勢が出てきます。マタイによる福音書26章39節では「うつ伏せになり」とあり、マルコによる福音書14章35節では「地面にひれ伏し」とあり、ルカによる福音書22章41節では「ひざまずいて」とあります。感覚的には上へ（主なる神さまに）向かってという姿勢が祈りの基本です。

Q　礼拝の最後に、手を上げて祈っている牧師さんがおられましたが、なぜ手を上げて祈っていたのでしょうか？

A　確認いたしますが、そのお祈りの時、あなたは目を開けて見ていたのですね！あのお祈りの仕方は、祝祷と呼ばれるお祈りです。旧約聖書、出エジプト記17章に出てくるモーセとアマレクとの戦いのときに、モーセが手を上げているとイスラエルが優勢になり手を下げてしまうと劣勢になったという記事に基づくといわれています。両手を挙げる先生と片手の先生とがおられるのは、それぞれの考え方です。これから、人生という戦場に出発しようという人々を励ます祝福の祈り、と捉えていただくと良いでしょう。さあ行ってらっしゃい！神さまが後ろから励まし、下から支えてくださいますよ。おびえることなく、元気に出発して行きましょう！これが、祝祷の意味です。主なる神であられる、主イエス・キリストの恵みと主なる神の愛と聖霊の豊かな交わりとが、あなたの人生に豊かにありますように、という祈りを聖職者である牧師先生にして頂く中を、私たちはそれぞれの人生へと派遣されて行くのです。そのような祝福を受けて、実り豊かな人生を歩んで行けますように祈ります。